

セッション3「より広い視野から捉える：ランドスケープアプローチ」質疑応答

(林野庁 赤堀聡之氏) Ms. Lee にはエチオピアの事例やバイオカーボンファンドの事例を見せていただいた。家畜や農業生産性の向上は生計の向上につながるが、これが実際にどうランドスケープアプローチにつながり、そして森林減少の抑止につながるのかについて、良い事例があればご教示いただきたい。

Dr. Verchot には、土地利用、それに関連する組織、ドライバー、法令などのさまざまな要素の分析、ランドスケープアプローチのモデルを示していただいた。実際の現場は非常に複雑だが、今後の適用について考えがあれば教えてほしい。

(気候変動コンサルタント, Ms. Donna Lee) かつて、エチオピアの森林生態系において非常に重要な地域とされるバレマウンテンへ、REDD プラスのプログラムの視察で訪問した。そこで、森林周辺の農家の方にエコシステムの話をし、どうして森林減少が起きているのかを理解させようとした。私が驚いたのは、エチオピアの問題点は土地の政策だけではなく、農業にもあるということだ。バレのエコリージョンでは干ばつにともない移民がかなり流入してきていた。この移民によって農業が拡大された部分は大きい。さらに、その移民の現象は家族計画政策によるところもあった。その地区の内部・外部の農家家族は、バースコントロールが行われていないためにたくさんの子どもがいた。それらの子どもがさらに子どもを産み、その結果、農地や代替的な生計手段を必要としていた。このようにランドスケープアプローチだけでは捉えきれないことを目の当たりにした。

森林減少の問題は非常に複雑だと思っている。農業その他の人間の動態に関わる根本的な問題に取り組むことができなければ、森林を保護することはできない。コミュニティの内部・外部の農家たちは参加型森林経営にも参加したことがあり、自分たちの森林を守るために何をしなければいけないかをよく分かっていた。オランダからの牛など、新しいタイプの家畜の方が生産性が高いという認識があり、それらを必要としていた。このように、魅力的なモデルをつくる以前に、地元のコミュニティは、自分たちの必要としているものを知っているということをおしは学んだ。それこそがスタートポイントになるだろう。ランドスケープアプローチの困難さというのは、必要なものを提供するための協力が必要だということで、例えば農務省が森林保護のために林業部門と協力して広いプログラム、新しい種、新しい家畜などを提供するというようなことである。

バイオカーボンファンドがエチオピアの問題に取り組もうとしていることは興味深く、他にもいろいろなドライバーがあると思う。コーディネートされたプログラムによって、牧畜や農業の生産性を上げ、集約的な森林管理を行うことによって排出削減につながるかもしれない。これは興味深い事例だと思う。

(CIFOR, Dr. Louis V. Verchot) 森林減少のドライバーは確かに森林セクターの外にあり、それらの基本的なドライバーに取り組む必要があるだろう。農業の向上は、森林減少を抑えるための対策の一つではあるが、農業以外のガバナンスを改善しなければ破壊につながる可能性もある。

その土地のリターンや労働のリターンによって、農業を拡大させることになるからだ。ガバナンスで強制的にゾーニングをしなければ、恐らく森林を守ることはできなくなる。従って、

家計を向上させ、人々の生産性をローカルに向上させ、ガバナンスを利かせるだけでなく、政府がそのランドスケープ外部との交渉能力をもつことも必要となる。

複雑な状況ではあるが、これまで、発展途上国における個々の自国の強みや、達成してきたことをふまえると、以前よりも持続可能に近い実践が行われている場所やモデルも見られる。ブラジルやインドネシアでは、森林減少がかなり抑えられているという事例がある。これらの成果は一日でできあがったものではなく蓄積されてできたものである。複雑さに依存するべきではないが、無視するべきでもない。

(林野庁 赤堀聡之氏) Ms. Lee の事例はまさにそのような状況だった。また、Dr. Verchot と同様のことを、JICA のラオス専門家が言っていた。そこでは、生計向上だけではなく、ガバナンスや土地利用計画がきちんとないうまく働かないという報告があった。

ここで、フロアから質問を伺いたい。

(Q1: カンボジア、環境省, Mr. Hong Heng) Ms. Lee に二つ質問がある。一つ目は、地域社会レベルで進められるプロジェクトと国家政府をつなぐプロジェクトの役割とは何かについてご教示いただきたい。二つ目に、民間セクターはどのように持続可能なランドスケープアプローチに関われるのか。

(Q2: UNU, Dr. Richard Rastall) REDD プラスに関しての事例について、これは法的拘束力に関連した問題なのか、もしくは REDD プラスの影響による問題なのか。多くの国では森林保全あるいは保護のために法規制を導入したり、テクノロジーやその他の方法によってそれを実行したりしている。ブラジルは確かに森林が増加したが、これはどの程度 REDD プラスによって説明がつくのか、それとも別のファクターがあるのだろうか。

(Q3: 森林総合研究所 藤間剛室長) ランドスケープアプローチの文脈では、サテライトのリモートセンシングによって全体的な土地利用の変化をモニタリングするほうが、特定の森林変化を見るよりも合っているのではないか。

(Q4: FAO, Dr. Sanz-Sanchez) 私たちは何年にもわたって、LULUCF という文脈で主に先進国によって議論が続けられてきたが、今までの LULUCF の議論とランドスケープアプローチはどう違うのか。

(気候変動コンサルタント, Ms. Donna Lee) 私たちは国レベルで多くの時間と労力を割いてモニタリング・測定や、土地利用変化を理解しようとしてきたが、実際に排出量を削減するために何をすればいいのかがまとまっていないと感じた。

昨年、ある国と仕事をしたときに、土地被覆の変化を把握して炭素の評価をするために、リモートセンシング技術に 5000 万ドルもの資金を出しているという話が出た。しかし、実際に排出を削減するためにはどうすればいいのかという点が欠けていた。また、200 ものアクションを挙げている国もあるが、限られた資源の中でどこから手を付けていくかという優先順位付けもされていないという状況だった。

このように、地域レベルではいろいろな活動が出てきているが、具体的にどのようにすれば排出削減につながり、人々の生活、地域社会に対してより良い環境を持続的に提供できるかという点がまだ欠けているのである。国が持続可能な開発をより広範にわたって実現していくためには、長期的な対策が重要である。しかし、そのような対策は、あまり多くは見受けられない。実際に地域社会に貢献するプロジェクトは数多くあるものの、それらが国レベルの戦略に反映されていないことは残念である。プライベートセクターに関しては、例えば巨大な農業ビジネスの投資フローを見たときに、公的な ODA 以外にプライベートセクターをつなげるにはどうしたらいいかと考えた。バイオカーボンファンド以外にもこの課題に興味を持ってくれる民間セクターは何社もある。彼らは CSR の観点からというよりも、原料を調達するための生産地不足により自社の将来のビジネスが困難になるのではという危機感から、この課題に興味を持っている。

彼らにとって、ランドスケープアプローチは新しいものである。今までは、サプライチェーンという形で農地まで追いかけることはあったが、土地の所有権などのより深いところまでは見ていなかった。ネスレを例にとると、これから先、バイオカーボンファンドを通じてオイルパームを持続可能な形で生産することができれば、予測可能性を確立し、生産される資源を会社が手にするという将来的な取り決めとともに、プライベートセクターからの投資を誘致することができるだろう。予測可能で入手可能、さらに持続可能な形ならば、一貫して継続的なものにすることが可能だし、関心をもつプライベートセクターは既にいる。

(CIFOR, Dr. Louis V. Verchot) 現在、学術界でディスカッションされているのは、ブラジルがどのように排出量削減を達成したのかということである。法整備やガバナンスの改善が達成の大きな要因になっていることは確かだが、他にも要因はある。ノルウェーはブラジルの排出量削減のプロジェクトに投資をしているが、それが国際的にみて REDD プラス活動の大きな牽引役になったわけではなく、アマゾンの土地利用や森林資源の減少などのプレッシャーが国の開発計画において、各地域の効率的な土地利用を盛り込ませる機会になったのである。

森林か、それとも土地利用変化にフォーカスするかということだが、より効率的に、そしてより積極的に森林減少のモニタリングをし、より多くの研究を行いつつ定量化と分析の作業を徹底する必要がある。

ランドスケープアプローチと他との違いは、AFOLU と REDD プラスの違いと関係している。AFOLU は、全ての土地利用における排出量削減に関するものである。しかし、われわれは、単に森林セクターにおける森林減少という意味ではなく、より幅広い分野での森林減少の問題に取り組んでいかなければならない。REDD プラスが CDM とは異なる方向性を取り、CDM において存在した複雑性を打破することができれば、効果的な活動になり得る。

(Q5 : FAO, Dr. Sanz-Sanches) AFOLU は、土地のコンポーネントに生計に関わる排出を加えたもので、土地そのものには関わりが低い実際には LULUCF に農地変化が含まれる。私の質問は、今後、LULUCF を含めたわれわれの土地を扱っていく上でどのように考え方をどう進化させていけばよいのかということである。

(CIFOR, Dr. Louis V. Verchot) この会議も一つの良い例だと思うが、REDD プラスでは、フ

オレスターが主要アクターであるという考え方が多く見られる。ただ、ランドスケープの観点では、それだけにとどまらない。鉱業など、農地だけでなく、その他の土地利用という部分でも包括的に考えなければ、排出量削減の達成はできない。森林省や林業省だけでなく、それ以外の部分で排出を行っているセクターも取り込んでいくことが重要である。